

# 青金石 Lazurite



分類: テクト珪酸塩鉱物  
 化学組成:  $\text{Na}_3\text{Ca}(\text{Si}_3\text{Al}_3)\text{O}_{12}\text{S}$   
 産地: アフガニスタン, バダクシャン  
 横幅: 約10cm GSJ M40626

この青色の絵具を固めたような鉱物はラズライトといい、和名は青金石せいぎんせきです。標本の青色部分を見ると、じけいけっしょう鉱物本来の形である自形結晶になっており、この形は菱形十二面体りょうけいじゅうにめんたいと呼ばれます。鮮やかな青の発色は結晶構造中のいおう硫黄に由来します。産地はアフガニスタンがほとんどを占めています。

地質標本館ではラピスラズリたすを尋ねられる来館者の方が多くいらっしゃいます。ラピスラズリはいくつかの鉱物が混ざった混合物で、その主成分が今回紹介している青金石です。古くから宝石や顔料に加工され親しまれており、一般的に利用される場合はラピスラズリたすの名前で扱われます。高品質のラピスラズリから取れる青色顔料はウルトラマリンと呼ばれ、ルネサンス期あたりから画家達は好んでこの青色を用いました。当時はとても高価で、金と同程度の価値がありました。画家フェルメールは、この顔料を使い過ぎたせいで多くの借金を残したと言われています。

ウルトラマリンがあまりに高価なため、1824年、フランスの産業奨励会が合成ウルトラマリンの研究を公募します。1828年にジャン＝バプティスト・ギメが安価な合成ウルトラマリンの開発を発表し、後にこれは「ギメ・ブルー」と呼ばれ商業的に大成功を収めました。ギメの技術革新後もより良い合成顔料を求めて研究は続き、そのおかげで私たちは多様な青色を楽しむことができるようになりました。

この標本は地質標本館2階にある青柳あおやぎこうぶつひょうほん鉱物標本に展示していますので、美しい青色の結晶を見にいらしてください。  
 (地質標本館室 瀬戸口希)